

南陀楼綾緊の 活字本でも読んでみっか?・第135回



明治の
サーカス芸人は
なぜロシアへ
消えたのか
歴史に埋もれた
「日本の奇跡」

根っからのドメスティック(国内志向)人間なのに、いや、だからこそか、日本から異国に渡った人についての本を読むのが好きだ。それも学者や作家の旅ではなく、移民、大陸浪人、芸人、娼妓、探検家、漂流者といった無名人(大半は貧乏人の記録が面白い。彼らの足跡を著者が掘り起こす過程じたいが、ひとつのドラマになっているからだ。

彼らの多くは日本を喰いつめたり騙されたりして異国に渡った。筆舌に尽くしがたい辛酸を舐めたはずだが、その反面、村や家という共同体からの解放感があったのではないかと火野葦平の小説「花と龍」にも、主人公の男女が支那で一旗あげる、ブラジルで農場を経営するという夢を語り合う場面がある。海の向こうには自由と希望があった。

大島幹雄「明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか」は、著者がモスクワで手にした三枚の写真からはじまる。イシヤマ、タカシマ、シマダという日本人のサーカス芸人の肖像や芸の様子を写したものだ。

このほです
このほです。ちょうど3.11事故

日本の芸人たちはすでに幕末から海外に進出しており、パリ万博にも出演した。芸人の足跡を追った研究書もかなりある。それらを参考にしつつ、著者はロシアに渡った芸人についての調査をはじめ。そして、日露戦争後の一九〇八年(明治四十二)にウラジオストックで公演した「ヤマダサーカス」に焦点を絞る。

ヤマダサーカスは座長の山田亀吉以下二十四人。軽業や曲芸の伝統を持つ日本人の芸は、ロシアの人々に歓迎された。なかでも、「ハラキリシヨ」は刀で少年を殺したり、はらわたを取り出したりするというもので、異様な反響を呼んだ。あまりにリアルだったため、警察と役人が棧敷の下を掘り起こして死体を探すという騒動にまで発展した。こゝまでウケれば芸人としてはしてやったりの気分だったはずだ。

彼らがロシア興行の出发点としたウラジオストックは、シベリア鉄道の終点であり、北陸の敦賀との航路も開かれていた。このルートを通じて、日本のサーカス団がロシアへ、ロシアのサーカス団が日本へと行き来していたのだ。彼らを招聘する「呼び屋」(プロモーター)もいる。著者はそれを「極東サーカスネットワーク」と称する。

このネットワークのなかで、木下サーカスがロシアのサーカス団で行なわれた技を習得し、「ロシア式飛び」という持ち芸にしたり、ヤマダ

サーカスのタカシマがイタリヤ人に太神楽スタイルの芸を伝えるという交流が生まれたのだ。

しかし、ロシア各地を旅し気ままに過ごしていたかのように見えるサーカス団にも、暗黒の時期が訪れる。一九一七年(大正六)に起こったロシア革命では、芸術と革命の一体化がうたわれ、サーカスも運動として展開される。タカシマも舞台俳優に演技指導していたという。

その後、一九三〇年代にスターリンによる粛清をはじめ、友人や身内までもが密告をし合い、それにより多くの人々が処刑された(オーランド・フィジス「囁きと密告 スターリン時代の家族の歴史」白水社、でその実態が報告されている)。

処刑された一人が、ヤマダサーカスにいたヤマサキ・キヨシだった。調査によるとヤマサキは、父が日本海軍の将校であり日露戦争で戦死していたこと、日本大使館との接触があったこと、ソ連が暮らしづらいうことを知人に話したこと、スパイだとされ銃殺された。しかし、約三十年後、息子からの上申書をきっかけに彼が無実であることが明らかとなった。

芸能を弾圧し、日本のサーカスを普及させていった経緯がある。つまり、シマダは日本とロシアで、二重に弾圧されたのだ。

サーカス・プロモーターである著者は、資料やロシアや日本のサーカス関係者のネットワークを駆使し、長い時間をかけてロシアに渡ったサーカス芸人の足跡をたどった。一筋縄ではいかなかったその旅も、本書の読みどころである。

感動的なエピソードばかりでなく、やっと出逢ったパントシの孫から、自分の本を三冊一万五千円で売りつけられ、それが退屈な内容だったというなかなかエグイ話もある。

最後に、著者はサーカス界の偉大な先輩たちへの敬意を込めて、こう書いている。

「彼らが歴史のうえに残した痕跡は、砂漠の中の砂粒のように小さなものかもしれない。ただここで描かれている芸、それこそが彼らの生きた証ではなかったか。その芸があったからこそ、彼らは国境を飄々と越え、異国で戦争や革命などで疲れ切った民衆たちを喜ばせ、しぶとく生き抜いてきたのである。(略)革命があるうが、粛清があるうが、思ったように生きていく。それが海を渡ったサーカス芸人の唯一のアイデンティティではなかったか」

●「明治のサーカス芸人はなぜロシアに消えたのか」祥伝社、本体1600円。